

福島の人をそばで考え、活動する研究者

木村真三さんの話を聞いて

もう一度被災者、被災地支援にむかうために

一月一三日の木村真三さん（獨協医大准教授）の講演は、聞いていて最後には涙が出そうになってしまった。木村さんは原発事故直後、福島に入り車で移動しながら放射能測定を行い、そのために国の研究機関をやめることになった。その活動はNHKで放映されて、多くの人が知ることになった。現在は福島県に赴いて活動している。

事故直後、あれほどテレビに登場した学者たちの多くは、事態の深刻さの前に沈黙し、現地に入ろうともしていないように見える。そのなかで小出さん、今中さんなどのごく少数の研究者が発言し、困難に立ち向かおうとしている。河田昌東さんたちのチェルノブイリ救援・中部の南相馬を中心として活動している。

木村さんもそうした数少ない研究者の一人だ。なによりも、福島の住民に寄り添っていくという姿勢が明確だ。そしていろいろな事情のなかで県外避難できずにいる人たちが、自分たちの力で安全を確保するための作業に協力している。まだ四〇代という若さでの木村さんの活動に、わずかではあるかもしれないが希望の光をみいだすことができたのだ。

どちらかといえば、一向に進まないがれき処理の

方向性や五山の送り火や花火問題など、どちらかといえば「絶望感」も沸きあがってくる自分の感情のなかで、木村さんの話は新鮮だったし、希望も見いだせ、自分も少しでも被災者、被災地のため、福島の人たちのためになることをなしていきたいという想いを持ち直すようにしてくれたものだ。（講演の内容は動画サイトなどで見られます。DVDも予定です。）

これからの文章はまとまりのないものですが、この間の自分の感想の一端です。あまりにも大きな困難な現実の前になにをどのように整理し、考えればいいのかわからずに混乱している自分の感情ですが、木村さんの姿を見て、もう一度気持ちを奮い起こすためにも書いてみました。

「これよりみちのく」

東北自動車道を北上し、福島県に入るとすぐに大きく掲げられている。四月下旬、被災地支援に赴くために通った時は、路面も大きく波打ちいよいよ被災地にはいるという感慨がうかんだ。

それ以降、何回かこの表示の下を通過した。回を重ねるごとに違った思いが浮かんでくる。やはり福島原発事故のせいである。被害の状況が明らかになるにつれ、そして放射能被害の大きさが明らかになるにつれ、「福島」から「フクシマ」に

なっていく現実。「これよりみちのく」というのが「白河の関」と重なってくるようだ。

地震も津波も前触れもなく人々を襲いすべてを奪い尽くした。自分が何度も赴いた岩手県大船渡、陸前高田の姿を始めて見た時には言葉を失い、涙を止めることができなかった。そこに住む人たちに想いを巡らしたときも、どのように自分が言葉を発しているのか見当もつかなかった。

しかし、人間の何千年もの営みは極限的な悲しみも、乗り越えていく力を見せてきた。三陸沿岸は明治以降だけでほぼ五十年ごとに壊滅的な被害をもたらす津波に襲われてきた。しかし、三陸の人間はそのたびに立ち上がり、豊かな恵みも与えてくれる、海と自然に向き合い続けてきた。

だが、福島でおきたことは、災害も含めながら自然と、海と、大地と、山と向き合ってきた営みを根底から覆ってしまった。突然の大地震、津波、そして安全であると信じていた（信じさせられていた）原発事故―崩壊。避難指示。福島沿岸部から、人々の生活の営みはなくなり、人もいなくなっていた。行方不明者を捜索することもできない、肉親や友の死を悼むこともできない。

当初の願いとは裏腹に、原発崩壊は進み、制御不可能になるのではないかという事態にまで立ち至った。小出しにされる状況はまさに崩壊寸前の姿であり、様々な対処も、その場凌ぎを積み重ねていることは明らかだ。いまだに放射能は拡散

され続け、海にも流出し続けられている。

三月の爆発で一挙に放出された放射能は福島だけでなく東北から関東、そして日本全体、世界へと拡がり、大地に降り注いだ。

福島の宮城の、岩手の人々の営みの源泉は東北の山々である。山に降り積もった放射能は、川の流れにのって飲料水に、農業用水に、そして最後は海に下っていく。森林が蓄えてきた大地の養分は米や野菜だけでなく海産物も育ててきた。三陸の豊かな海は東北の山々が育んできた。

多くの人々は逃れ、難民と化している。町役場ごと埼玉の高校跡に避難した人たちの姿は、難民キャンプそのものではないのか。

福島県も政府も、避難所は解消したと言っているが、なんとか雨露をしのぐ場所を与えられたにすぎないものだ。仕事はどうするのか、子どもの学校は、長年のコミュニティは。

もはや、故郷にもどること、以前の生活を取り戻すことができない中でどのように未来をみることができるのだろうか。

何度も言うが、地震や津波だけなら、復旧、復興への希望も厳しい状況の中でも見いだすことは可能だ。そこにあるのは絶望だけではない。しかし、福島の人たちのみているのは「絶望」だけではないのか。

県外避難した人だけではない。県内の仮設住宅などに入居した人たちも同じだ。そして、いろいろな事情でその場に居つづけざるを得ない人々

も多い。なによりも東北にはこの土地と分かち合い想いを強くいだいている人たちがいる。

この文章を書いている途中で福島県が県外避難者の民間住宅借り上げの新規募集を今月末で停止するというニュースを見た。県外への人口流出を抑えるためらしい。県内にとどまるのも県外に避難するのもそれぞれが判断することだろう。その判断を最大限尊重して、できる限りの援助をするのが行政の仕事ではないのだろうか。

福島県の人たちもなにも積極的に故郷を捨てようと考えているわけではないだろう。苦渋の決断であるはずだ。なのに、半ば強制的に県内に留めようというのか。

福島県が県内に住み続けてほしいと考えるなら、国と東電に即刻、原発崩壊以前の状態に戻すことを要求することだろう。ごまかしの除染、ごまかしの「冷温停止状態」―事故の収束の幻想のばらまきではないはずだろう。

いったいどこで福島が「安全」になったのか。相次ぐ米の出荷停止、県庁所在地の福島市まで出荷停止になった。汚染は収束するところか拡大しているようにさえ見える。

今、最優先で政府と東電がすべきことは福島原発の放射能流出を止めることだ。この国の持てる力のすべて、投入できる人材、金、技術すべてを振り向けることではないのだろうか。あれだけの大地震でようやく生き延びた命、多くの犠牲者に託された命を厳冬期に向かうなかでこれ以上失

わせてはいけない。政府と東電が作り出した原発事故での被害の拡大を食い止め、難民化した人たち命、暮らし、生活を守り抜く。それこそがいま日本が必要としている政策ではないのか。

暴言を繰り返しながら沖縄の人たちを蹂躪し辺野古や高江に米軍基地をつくることではない。TPPで、東北の農業、漁業の息の根をとめることではない。大増税をし弱者切り捨ての社会保障削減ではない。非正規労働者をさらに拡大するよう労働行政ではないはずだ。

一時、あれほどきこえた「がんばれ日本」「日本は一つ」などのスローガンはほとんど聞こえなくなかった。かわりに聞こえてくるのは「白河」以北は切り捨てるのではないかと思われる政策の大合唱。

政府機関も国会も東電本社も福島第一原発の隣にプレハブを建て移転し、仮設住宅で生活しながら政策を立案し、議論し実行すればもう少し切実なものになるのではないか。原子力推進に加担した機関、研究者も同様だろう。

東大アイソトープ研の児玉さん、木村さんをはじめ現地で頑張ろうとする研究者の姿に本当の科学者の良心と希望が見出される。

なにが正しい方策なのか、正しい答などはないかもしれないが、現実苦しんでいる人たちに寄り添うこと、そのために自分を動かすことで少しでも彼らの努力に近づきたい。人を動かすような力も知識もない自分だけ…。(佐々木 亨)